

## 国語外国語化論の再考Ⅳ

— 森有礼の「国語英語化論」と志賀直哉の「国語フランス語化論」について —

山井 徳行

### Sur les Propositions du Remplacement du Japonais par une Langue Etrangère IV : Celle de M. Arinori MORI et celle de M. Naoya SHIGA

Noriyuki YAMAI

(本稿は、『名古屋女子大学 紀要 第52号 人文・社会編 平成18年3月』に発表した「国語外国語化論の再考Ⅲ」の続編である)

#### 第九章 読みにくい日本語

日本人の活字離れがいろいろな方面から指摘されている。実際に、古典や堅い本の売り上げが伸びていないことは、大きな本屋からそれらの本が消えていく、あるいは置かれていないことなどから分かる。また、大学で接する学生が、本は読まないと平然と言いつけることが珍しくない。

勿論、テレビ・映画・漫画などの他のメディアの発達や、IT革命によるインターネットの普及など、余暇の選択肢が増えたことが、読書の時間を制限するようになった、と考えるのはおそらく正しいだろう。しかし、そのような社会の変化は他の先進国でも起きているが、それらの国では日本ほど本離れが激しくないようである。資料的な裏付けがあるわけではないが、日本人は昔から活字を好み、通勤電車などでも文庫本をよく読む民族ではなかったか。

一方、最近では活字離れに対して、日本語を見直そうという「日本語再発見」型の本がよく売れている。例えば、この論文のIで取り上げた大野晋の『日本語練習帳』なども、その堅い内容からしてよく売れたものだと思うし、最近では齊藤孝の『声に出して読みたい日本語』(2001年9月)などがそのひとつである。夏目漱石や森鷗外の作品が国語の教科書から消えて行くという現実に対して、ある危機意識の表現と解釈することが出来るだろう。その危機とは、前述したように国語改革に伴った文化の継承の、ある断絶ではないか。

その断絶を、齊藤孝の『声に出して読みたい日本語』が上手く表現していると思う。島崎藤村の「初恋」を、昭和41年11月に筑摩書房から出版された全集から最初の4行のみを引用して検討してみよう。「まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき 前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり」となる。この中でルビが振ってあるのは、「花櫛(はなぐし)」のみである。それが、齊藤孝の本では、すべての漢字にルビが振られており、さらに「思ひけり」の「ひ(い)」にもルビが振られている。正確に読むためにされた工夫が期せずして読みに関する断絶を明確に示したと言えよう。

このように、有名で歌謡曲にも歌われているこの藤村の詩が、実はルビなしでは多くの人間にとって正確に発音できないことを、引用文は意味している。比較的容易に読める「初恋」でもそうなのだから、他の、『声に出して読みたい日本語』の文章は、普通の教育を受けた人間に

は所々、読めない文であることが推測されよう。

所々で読みが確定しないことは、けっして些細なことではない。斉藤孝がこの本で日本語のよさを見直そうと提言したとき、それは暗唱を通して日本語の持つリズムと適切な言葉との調和の魅力にもう一度、気付いてほしいと訴えたかったのではないか。読みが確定できなくては、暗唱ができない。暗唱ができなくては反芻して味わうことが出来ない。すると、記憶に定着しないので、会話で話題にすることが難しくなる。このようにして、少しずつ忘れられていく、といった具合に、読みの決定は言語の維持・継承に大きな役割を果たす。

そもそも言葉とは何であったか、と問うと、もっとも自然な答えは、意味を込めた音であった、となるだろう。特に、言語論を始めようというのではない。ただ、もっとも根本的なことを再確認したいと思うだけだ。教育が普及しない時代には、文盲といわれる文字を読めない人達が日本にも多くいた。世界の識字率がときどき報道されるが、そこから世界ではまだ文字を読めない人間が多くいることがよく分かる。そのように人にとっては言葉とはまず音なのである。

識字率がほとんど100パーセントに近い日本では、言語が音から始まるという意味が軽視されている。制限されたとはいえ常用漢字で1945字を一般には複数の読み結びつけて記憶しなくてはならないことから、学習の際に音声よりも表記に重点を置きやすい日本語の特徴がある。それに、漢字の存在ゆえに多数の同音異義語が存在し、思い浮かべる漢字によって区別するという習慣が結びつき、日本語は視覚的な言語であるという一つの偏見が出来上がったのだろう。しかし、言語とはまず音声なのである。そこに表記の技術が加わり、文字が発明されたのである。音が自然なのに対し、文字は人工なのである。

20世紀は映像技術が発展した時代で、現在も視覚が優勢な文明の中に我々は生きている。例えば、音を音波として映像化する技術などはその象徴である。視覚で捉える資料とは空間的であり、時間によって制限されないだけ客観的であり、多くの人間の賛同を得やすいことも視覚文明に味方している。だが、言語や母語がまず音であることを忘れてはならない。

言語が音であることを軽視して、活字媒体の中で読みの定まらない熟語をルビ無しで使用していると、話し言葉と書き言葉との通路が一方通行になってしまう。書き言葉が語彙の貧弱な話し言葉の影響を受ける一方、書き言葉の適切な表現が話し言葉に生かされないという欠点が出てくる。これが活字文化と会話を必然的に貧しくしている。

この観点から、国語問題をもう一度、考え直してみよう。

森有礼の国語英語化論の時から、漢字が日本語の最大の問題として何度も論じられてきた。読み書きの観点から考察すれば、制限の無い時代の旧漢字は習得に多大の時間と労力を必要とするだろうことは疑いがない。そして、第二次世界大戦後、アメリカ占領軍の強い意向もあり、漢字の簡略化と使用制限が行われた。その結果、現在では、1006字の教育漢字と1945字の常用漢字が基準となって、日本人の活字生活が営まれている。しかし、2004年9月に法務省が戸籍法施行規則を改正して、使用可能な人名用漢字を983に増やしたことを忘れてはならないだろう。

この国語政策が是か非か、という議論をここでするつもりはない。それは筆者の力を超えているし、この論文の範囲をも逸脱する。

それでは何が問題なのか、この国語改革の中で日本語に起きた大きな変化とそれを補うための適切な対策が取られなかったことである。

戦前に出版された本はその表記の難しさ故に、戦後の教育を受けてきた人間には非常に取り付きにくい。旧漢字や旧仮名遣いは、その知識のない者にとっては煩わしいし、また難しい。

皮肉なことに、新漢字・新仮名遣いに移行するにつれて、以前は漢字の難しさ故に普通であったルビをなるべく排除するという方針をマスメディアの主要役達が取ったために、またそのルビの振り方に統一性がないために、常用漢字からなる漢語も読みが定まらないというという結果になり、これがさらに活字離れを加速した。この過程で重要なものが見逃されていた、と思う。そこで見落とされたものは何か。

漢字制限がなく旧漢字を自由に使って活字文化が営まれていた時、出版物の音読や理解は一般の日本人にとってはたいへん難しい、と認識されていた。そこから、一般大衆を読者に想定していた新聞などは、すべての漢字にルビを振るという手間をかけた。これは、誰が考え出したか知らないが、漢字仮名交じり文である日本語にとっては当然の知恵であった。

漢字制限政策はこの総ルビを廃止して、基準の定かでないばらルビを一般化した。難しいと思われる漢字に書き手が自由裁量でルビを振るという方法である。これは新聞などでは小説家や随筆家たちが著者の権限として行っている。新聞記者は、常用漢字以内で記事を書くことを求められている。常用漢字以外の漢字を使わざるを得ない時は、その部分だけ平仮名にするか、あるいは括弧の中に読みを入れるかしている。ここに、大きな見落としがあった。

すなわち、漢字制限をしてさらに複雑な旧漢字をある程度、簡略化したのだから、教育を通しておおかたの漢字を学習する一般の日本人は、そのようにして書かれた文は読めて当たり前だという論理が浮き彫りになる。すなわち、漢字制限によって使用を公認された常用漢字は、誰でも読めて理解できる筈だという考えだ。この考えは次の三つの理由により、非現実的であることが分かる。

第一の理由は、人間の学習に関する考えだ。人間はものを学ぶが、忘れてしまう。大事なことならば、また学び直して知識を確かなものにしていく、そのような存在なのだ。義務教育やその後の高等教育で常用漢字を学んだからといって、それで忘れないというものではない。このことは取り立てて証明する必要はないと思う。なぜなら、人間の日常体験がそれを証明しているのだから。総ルビの時は、この学び返しが常になされていたのだ。ただ、漢字制限に際してはこんな基本的な人間考察が見落とされた。

第二の理由は、常用漢字の用法では音読みも訓読みも制限されているが、そこで認められていない読みをする場合が考慮されずに、使われていることだ。具体的にいえば、「大人」を「おとな」と、「田舎」を「いなか」と、「為替」を「かわせ」と、さらには「昨日」・「今日」・「明日」をそれぞれ「きのう」・「きょう」・「あす」と読ませる慣用読みである。そのほかに、小豆・笑顔・時雨・五月雨・梅雨・雪崩・土産など馴染みのあるものが多い。次に、「兄妹」や「姉弟」をともに「きょうだい」と、「父娘」や「母娘」をともに「おやこ」と読ませたりするのも、一種の慣用読みと言えよう。そして、最たるものが人名や地名などの固有名詞である。幾つかの難読の地名を列挙すると、「鹿角(かづの)」「福生(ふっさ)」「各務原(かがみはら)」「宿毛(すくも)」「和泉(いずみ)」などがある。これはまだかなり知られているほうであり、各地方には想像も付かないものがある。また、簡単な漢字の組み合わせでも思いも付かない読み方をする氏名を持った人に会った経験のない人は少ないだろう。

第三の理由は、常用漢字には音読みや訓読みが二つ以上ある漢字がかなりあり、「納得(なつとく)」や「出納(すいとう)」の「納」の字のように、それぞれを知らないと読みが決定できないことだ。湯桶読みや重箱読みもおなじように読みの決定を不確定にしている。さらに、「買物」をふつう「かいもの」と、「願出」を「ねがいで」と読ませるように、送り仮名の省略によって、同じような事態が生じている。最近、「児童買春禁止法」が成立して、「買春」を「売春」

と区別するためにわざわざ「かいしゅん」と読ませる。このような複雑な湯桶読みは、それを知らなければどうにもならない。回春のために買春して、ついには改悛すると、変な同音異義語の言葉遊びまで出来てしまう。

三つの理由から、漢字制限をして新漢字に改めて活字を民主化しようとした試みは、ルビの基本的廃止という方針に足を取られて、活字文化を貧弱にし魅力のないものにしてしまった、と言えよう。

ルビの廃止の議論は、繰り返しになるが、上述の単純な論理の上で正当化されたのだろう。すなわち、難しい旧漢字を簡略化し、使用可能な漢字を制限するのだから、そこで選択された漢字などは覚えるのが当然で、それは容易に覚えらるはずである、と。このような議論が識者の間では認されれば、文字の横にミミズみみたいなルビがついているのは、欧米語にはなく、みっともなく視覚にも悪いという、およそ感覚的な意見が通ってしまったとしても驚きではない。

しかし、上で示したように、通常複数の読みを持つ常用漢字1945字の組み合わせは、莫大な数にのぼり、「買物」に見られるような送り仮名の省略や、湯桶読み・重箱読み、さらには、「手紙」のように、訓訓読みなどが盛んに行われ、さらに、固有名詞においては全くの慣用読みが行われていることから、現代語でも読みが決定できない場合が多々出現する。これが読書における赤信号効果となり、活字文化をぎこちないものとしている。

さらに、このような状態では国語教育の重点は当然、読み書きに必要な漢字の習得に力を入れざるをえず、ルビの振り方を含めてその読みに明確な基準がないという意味で子供達に暗記を迫ることになり、母語で培われるはずの論理的思考能力や問題設定能力の訓練が後回しにされるという有害な副産物を産んだ。

日本語が漢字仮名混じり文で書かれることは、鈴木孝夫が指摘するように合理的な理由があるものであり、日本語による日本の近代化を促進する重要な要素になった<sup>1)</sup>。そして、日本語における漢字の問題や表記の問題を論じるならば、戦前の啓蒙思想の中で生まれたルビの合理的活用で問題の多くが解決すると思う<sup>2)</sup>。戦前の新聞や雑誌には、活字を拾いそれを組み合わせるといって植字工の手間が掛かる作業にもかかわらず、多くのルビが使われていた。総ルビの本も多かった。それが多くの教育効果をもたらしたことは上述のように想像に難くない。逆説的に言えば、ルビの廃止によって明らかになった、読みが確定しない三つの主な理由が、読者を想定する合理的なルビの復活によって解決すると考えられる。

さらに、現代のように情報技術が発展した時代では、ルビを振ることは技術的に容易になっている。新仮名遣いでルビを振り日本語辞典の見出し語と揃えれば、古典の世界が現代人の手の届くところに帰ってくる。そのいい例が、インターネットの中の無料図書館「青空文庫」である<sup>3)</sup>。

最近、青空文庫の中にある島崎藤村の「夜明け前」を通読した。実は、筆者が高校生の時に藤村全集を買って持っているのだが、そのばらルビの振り方があまりに部分的で読めなかった。しかし青空文庫の丁寧なルビで楽に読めた。それでも小学生や中学生には難しいと思う。そこにはもう一工夫、例えば小学生用のルビの振り方を考える等が必要かも知れない。とにかく、日本語の表記と読みの困難さ故に、古典が埋没されるのは残念だ。

日本語の魅力が発揮されるとしたら、まさに時によって選り抜かれた古典の中でこそ、と、思う。戦前の古典的な作品が読めないというのはこれはなんとも異常なことであり、それに対する対策が既に発明されてあるのだから、それを利用しないのは余りに愚かだと思ふ。

ここで、一つの典型的な例を提出しておきたいと思う。それは、個人全集に関することだ。個人全集を発行することは、その文学者・思想家等の作品を世の中に広めて、また研究者たちの作品研究の資料ともすることだ。当然、編集者や発行者は、その本が多くの人に読まれることを期待すると考えてよいだろう。

そのとき、編集者にとって、著者の原文をできるだけ尊重するという態度がとられるのも、理解される。しかし、国語改革によって変化した現代日本語を習った人間にとって読むのが難しいとされる作品をどう扱うべきかを考えると、古典の流布と原本の尊重との間に矛盾が生じてしまう。旧漢字・旧仮名遣いを新漢字・新仮名遣いに直すことは、原本の尊重よりも作品の流布を選んだ結果である。旧漢字や旧仮名遣いをそのままにした全集は原典の尊重から来ている。多くの全集は、原典尊重を選び、作品を現代の一般読者から遠ざけている。

そこで、ルビを振ることを提案したい。原著にはないルビを振ることは、新漢字・新仮名遣いに直すことに比べると、原書の作品の質を変える度合いは少ないと思われるし、作品を現代の一般読者に近付けるのに大変役立つだろうと思う。これは特に全集の編集者に強く訴えたい。勿論、新漢字・新仮名遣いを採用し、さらにルビを振り読解を容易にすることに越したことはない。

一つ例を挙げたい。それは、1997年に逝去した多作の作家で、よく読まれている井上靖の全集が1995年から新潮社より出版された。編集方針として、「初出を底本とする場合でも、文字表記は原則として新漢字、現代かなづかいに統一する。ただし詩編についてはこのかぎりではない」<sup>4)</sup>とある。読者の便をはかる方針と思う。それでも、筆者が提起した問題は変わらない。

第一巻は、「北国」「運河」「季節」「遠征路」「乾河道」「傍観者」「星欄干」「拾遺詩編」といくつかの短編からなっている。ストーリーテラーとしても有名な彼の作品群は、多くの人間が近付きやすい作品である。彼の詩は、「私はこんど改めてノートを読み返してみ、自分の作品が詩といふより、詩を逃げないやうに閉じ込めてある小さな箱のような気がした」<sup>5)</sup>と、彼自身によって謙虚に定義されているが、美しい散文によって書かれている。彼は1907年生まれで戦前に教育を受けて、日本語を学んで来た世代で、とうぜん常用漢字以外の漢字も多い。学術的に漢字を多用した作家ではないので、読みやすい部類だが、上に挙げた詩集のなかに、上述の理由で、読みが決定できない漢字がかなり多い。例えば、「北国」中に、次の詩がある。

#### 生涯

若いころはどうかして黄色の菊の大輪を夜空に打ち揚げんものと、寝食を忘れたものです。漆黒の闇の中に瞬ばあっと明るく開いて消える黄菊の幻影を、幾度夢に見て床の上へ飛び起きたことでしょう。併し、結局、花火で黄いろい色は出せませんでしたよ。

——老花火師は火薬で荒れた手を膝の上において、痣のある顔を俯向け、かう言葉少なく語った。

黄菊の大輪を夜空に咲かすことはできなかったが、その頃、その人は「早打ち」にかけては無双の花火師だった。一分間に六十発、白熱した鉄片を底に横たえた筒の中に、次々に火薬の玉を投げ込む手練の技術はまさに神業といはれていた。そしていつも、頭上はるかに高く己が打揚げる幾百の火箭の祝祭に深く背を向け、観衆のどよめきから遠く、煙硝のけむりの中に、独身で過ごした六十年の瘦躯を執拗に沈めつづけていた。<sup>6)</sup>

旧漢字も少し混じっているので、若い人は解読に苦勞するかもしれない。「併し」などはなぜ

「しかし」と仮名にしなかったのか不思議に思う。

この詩はほぼ新漢字と新仮名遣いに直してあるが、やはり、読みが決定されない熟語があることを強調したい。それも極めて一般的な易しい漢字やその熟語に関する。ルビが振ってあるのは「火箭(ひや)」だけであることを付け加えて、論を進めていきたい。

「黄菊(コウギク)」は「黄金(オウゴン)」の類推から、オウギクと読んでしまいそうである。「己」の読みは、オノかオノレか、迷うであろう。筆者はこの詩が好きで、オノと読んで正しいと思っていたが、この論文を書きながら、漢和辞典<sup>7)</sup>を引くと、常用漢字の訓読みは「おのれ」であると書いてある。詩の響きからすれば、オノのほうが相応しいと思えるのだが。しかし、「寝食(しんしょく)」をネシヨクと信じ込んでいたので、筆者の詩的直観もあまり当てにならない。

井上は「己」を、なんと読ませたかったのか。彼の頭の中ではいかなる読みだったのか、知りたいが、彼はもうこの世にいない。

「夜空(よぞら)」や「神業(かみわざ)」も、熟語の読みの大原則は音々読みだから、それを適用すれば、ヤクウやシンギョウと読む人がいても、一方的に責められないと思う。

詩という音の響きが文学的要素の中核を為している分野においても、このように読みが決定されないことは、あるいは読者がすぐに読みを決定しにくいということは、いかにも残念である。口ずさまれて、その価値がより発揮される詩においても、編集者は、読みを決定するという単純な仕事を放棄した、それも原典の尊重という言い訳で。

詩においてこうであれば、小説においてはなおさら、読みを決定できない漢字や熟語がルビも振られることなく、原典尊重の原則で収録されているだろうことは想像に難くない。

井上靖のように非常に読まれた現代作家の作品の魅力が若い読者が味わえないことが残念であり、日本語の活字文化にとって大きなマイナスだろうと危惧する。他の詩人や作家達の場合にも問題はまったく同一である。

日本語の致命的欠陥によるのなら諦めもしようが、平仮名やカタカナでルビを振るという、読みの決定に関するすべての問題をほぼ解決することができる知恵があるにも拘わらず、このような状態であることを嘆かわしいと思う。

『声に出して読みたい日本語』という本が出版されたとき、読みを決定できないという意味で読めない漢字・熟語が散りばめられている活字文化の現状がことさら浮かび上がった。これは、明治維新の時に特に議論された国語の問題が今でも解決されていない、ということを示している。

前にも述べたが、西洋社会との接触以降、日本の近代に起こった不幸な文化継承の部分的断絶が活字離れを起し、日本文化と日本語の魅力を殺いでいると思う。自国文化や自国語に魅力を感じることが出来ないと、外国文化や外国語に魅せられていくというのは自然なことだと思われる。ここに国語外国語化論が胚胎するのではないか。

## 第10章 欧米語の日本人にとっての難しさ

次に、英語やフランス語等の欧米語の日本人にとっての学習の困難さについて説明する。人間は、困難なものに惹かれるという前提があることを認めて、論を進める。

欧米の言語、それだけでなく、子音が重要な役割を持つ世界の言語を日本人が学ぼうとする場合に脳生理学的な困難に遭遇することが明らかになった。

山田玲子は、LとRの聞き分けの研究に長い間、取り組んできている。その研究結果はマスコミで頻繁に取り上げられているので、一般的にもかなり知られていると思われる。例えば、1990年4月2日の日本経済新聞によると、「日本人が苦手といわれる英語のRとLの発音を聞き分ける能力を身につけられるのは八歳まで--国際電気通信基礎技術研究所(エイ・ティ・アール)が帰国子女を対象に実施した発音の聞き取り実験でこんな結果が明らかになった。英語教育については何歳から始めるのが効果的なのか、専門家の間でも意見がわかれるところだが、今回の成果はその議論に一石を投じそうだ。・・・」とある。

帰国子女の聞き取り試験の結果によると、八歳以後にアメリカなどで英語で生活するようになってからもアメリカ人と同じようにRとLを聞き分けることがむずかしくなるという。

この研究の結果は重要な考察を導き出す。それは、日本語を母語とする人間が、上に挙げた言語を8～10歳の間にあると思われる学習の臨界期を過ぎてから学び始めると、音素の点では日本語にないものは聴覚的に細胞レベルで識別されない、という命題である。人間生理に関することから、奇跡的な例外を認めない訳ではない。しかし、一般にはどんなに聴解の努力を重ねても母語にない音素が識別できないと認めざるを得ない。

他にも、この論文で何度も引用した鈴木孝夫も『教養としての言語学』(岩波新書460)で、鳥の鳴き声の研究成果を援用して「発声の基本や音韻の習得、そしてその識別力の点では臨界期が極めて早く、おそらく五、六歳前後に訪れると思われる。これに対して、文法構造の自然習得はもう少し後まで可能性が続くらしい。最後まで自由な学習が許されるのは語彙の獲得、つまり新しい単語を覚えてそれを正しく再現できる能力である」(pp39-40)と音素レベルでの限界をなんと生後5～6歳と非常に早い時期にあると指摘している。

フランスの著名な言語学者アジェージュ (HAGEGE) によると、この臨界期は11歳という。『L'enfant aux deux langues, Paris. Odile Jacob, 1996』から引用してみよう。

#### Le seuil fatidique de la onzième année

L'enfant possède, comme on vient de le voir, une remarquable sensibilité auditive aux propriétés qui distinguent les sons dans les langues humaines(1). Mais il se produit assez tôt une perte rapide de ces richesses héréditaires. En effet, s'il est vrai que les aptitudes inscrites dans son code génétique sont très vastes, il est aussi vrai, néanmoins, que la pression du milieu est très puissante. On constate que dans la période située entre six et dix à douze mois, les capacités distinctives de l'enfant commencent à décroître(2). Il existe des oppositions sonores qu'il n'entend pas dans son milieu, pour la simple raison que la langue qui s'y parle ne les connaît pas. Ces oppositions deviennent de moins en moins sensibles à son oreille. Cette récession s'explique probablement par le fait que l'absence de stimuli dans l'environnement induit une sclérose des synapses qui leur correspondent. Les neurobiologistes, pour rendre compte de l'effet direct qu'exerce sur les structures enfantines ce conditionnement négatif dû à l'action essentielle de l'environnement, parlent de stabilisation sélective des synapses (Petit 1992)(3). Cette formulation dit assez combien la pression extérieure est forte. [p.27]

La probable sclérose des synapses dont je viens de faire état ne signifie évidemment pas une nécrose de zones neuronales particulières, laquelle serait de nature

pathologique et n'interviendrait qu'en cas de lésion. Il s'agit seulement d'une mise en veilleuse de capacités fonctionnelles non sollicitées. C'est la raison pour laquelle la récession observée n'est pas irréversible. Pendant longtemps les enfants correctement instruits dans une deuxième langue demeurent capables d'y acquérir une compétence comparable à celle des locuteurs nés dans la langue. La période critique se situe entre sept mois, âge où apparaissent les premiers signes d'un déclin des aptitudes distinctives observées dans les premiers mois de la vie, et dix ans, âge au-delà duquel ce déclin, encore largement réversible jusque-là, cesse de l'être(4). En effet, les interférences entre la langue principale et la langue enseignée comme seconde deviennent alors impossibles à conjurer, au moins dans la majorité des cas, c'est-à-dire en ne tenant pas compte des adolescents particulièrement doués, qui demeurent l'exception.

Il faut rappeler encore, néanmoins, que ce seuil critique de la onzième année concerne surtout l'apprentissage de la phonétique. Dans les domaines autres que celui des sons, une langue étrangère peut être fort bien apprise à l'âge adulte(5). C'est pourquoi l'objection que l'on soulève parfois contre la notion de période critique paraît résulter d'un malentendu, dès lors qu'elle fait état de la bonne acquisition de la grammaire et du lexique chez des sujets qui ont depuis longtemps dépassé l'étape de l'enfance. [pp.28-29]

原文がフランス語なので、理解を助けるために下線部分を訳しておく。原文中の（ ）と数字は、抄訳の場所を示す便宜的なものであり、筆者が付け加えた。

- (1)今見てきたように、子供は、人間のすべての言語に含まれる音を区別する特徴に対して素晴らしい聴覚的感受性を持っている。
- (2)6ヶ月から12ヶ月の間に、子供の聴覚識別力が弱まっていくのを認める。
- (3)脳病理学者は、環境の本質的働き掛けによる否定的条件付けが子供に及ぼす直接的影響を理解するために、シナプスの選択的安定化を持ち出す。
- (4)必要とされない機能的能力の潜在化のみが問題なのだ。そういう訳で、観察される能力の低下は回復不可能なものではない。第2外国語をきちんと教えられた子供達はその言葉のネイティブと同様の能力を獲得することができる時期は長い。学習の臨界期間は、出産後の最初の数カ月に観察される識別能力の減退を示す最初の徴候が現われる7ヶ月目と、それまではその減退もまだ十分に回復可能なのに、それ以降は不可逆的になる10歳の間にある。
- (5)しかしながら、11年目の臨界期は特に音素の習得に関することを強調したい。音声以外の他の分野では外国語は大人になってもきちんと学習できる。

そうなる、英語やフランス語のように（特に英語だが）子音が多くかつ重要な役割をする言語を普通の条件で学ぼうとすると、日本人は隠れた重いハンディキャップを負っていることになる。この生理学的な限界は、多くの人間が経験的にうすうす知っていても、なかなか認められないような考えなのである。なぜなら、人間の努力には限界があると主張しているのだから、公正でないと考えられる。それに、日本人は欧米語を勉強したくて仕方がないのだから、その習得に生理的な限界があると言われると心情的に納得できないのだ。それは恋煩いに



似ている。

言語は音声から始まった。人間の学習において音声の持つ重要性を否定することはできない。視聴覚機器の発達した現在、言語を音と文字と文法によって理解できれば効率がよいに決まっているが、その一つの方法に大きな欠点がある日本人にとって、英語や他の欧米語を学ぶことは他の言語を母語とする人間にはちょっと見当の付かない難事業なのである。もちろん、聴解力の欠陥なので、読解力の面では問題はほとんどないことを誤解を避けるために付け加えておきたい。

ここから、ふたつの論理的帰結が出てくる。一つは、逆説的に聞こえるが、英語や欧米語をマスターしたいという欲望が倍加する、という事態である。もちろん、欧米に対する憧憬という日本文化を覆う神経症的症状が前提となる、が。

登頂が困難な山であればあるほど、登山家はその山を征服したい欲望にとりつかれる。困難であればあるほど欲望は強まる。また、何らかの事情で臨界期以前にそれらの言語に触れ、母語言語者と同様な能力を獲得した同胞の存在は、その実現可能性を示唆するように働き、その欲望を強めることになるのは当然だ。しかし、そこには生理的な溝があるのだ。しかし、重ねて言及するが、読解力に関しては問題はほとんどない。

もう一つの意外な帰結は、日本人の外国語能力の低さが結局は日本の近代化を成功させる隠れた要因になった、ということだ。

実際に外国語が堪能と思われている日本人が大勢いるが、多くの人はこの脳生理学的欠陥を免れないのだから、外国語で生活することは必然的に苦勞の多いものとなる。私はこれを先天的部分的難聴の仮説<sup>8)</sup>と名付けたが、この欠陥は言葉で遊び、冗談を言い合うという人間にとって自然で、生活の潤いになる楽しみを外国語で生活する日本人から奪う。単に外国語で生活する普通の困難さだけでなく、日本人特有の困難さからくる生活の苦さがある。そこに、なぜいくら努力しても言葉が進歩しないのだらうという、自己嫌悪から来る屈辱感さえも混じる。そうなると、外国で仕事のできた有用な日本人が結局は日本に帰国する道を選んだとしても不思議はない。彼等はまた、原書を読むことによって屈辱感を克服しようとした。彼等は読書家であり、多くの専門書を買って帰国した。

逆接的だが、彼等の聴解力の欠陥が読書に集中させ、西洋の文明を学ぶことに役立ったと思われる。生活を楽しめない分、本を読んで勉強したのであろう。それが文明の移植の確実な方法であった。本には無駄なく本質的な事柄が詰まっている。

明治維新以来の日本の知性達が他の国の人間よりも愛国心が強いから、国のために帰国したと思うのは虫のいい話である。結局、言語的に日本に帰るほうが本人にとって都合がよかったと解釈するほうが正しいと思う。

このことは、英語やフランス語を公用語（それは殆どの場合、母語と同じ機能をする）とする旧植民地の国々が経済的離陸を果たせないで苦しんでいるが、その原因の一つに、国のエリート達はその言語的能力故に旧宗主国で勉強し、そこで得られる経済的利益や生活の便利さのために、時には人種差別に苦しみながらも帰国せず、祖国の発展に寄与できないという近代史の事実と皮肉な対照をなす。

森や志賀の唱えた国語外国語化論は見方によっては売国的な論に見える。しかし、いままで見てきたように、彼等の意見はけっして完全に忘れられた訳ではなく、そこかしこで部分的にはあるが現実化している。日本人は他の民族よりも愛国心が強いというのは全く迷信に過ぎないのだ。欧米語習得の困難さ故に皮肉なことに、多くの日本人が外国語かぶれになりながら

大規模な頭脳流出が起こらず、日本は近代化に成功し、世界第二の経済大国になった。

しかし、高度産業革命を経て情報革命も成熟し、世界の人口移動が極めて容易になった今、日本人は、日本語を外国語に置き換えることも可能になるという、日本近代史の特異な現実の中に生きている。

## 終章 日本人に突きつけられた選択

日本の現実、森有礼や志賀直哉の国語外国語化論を一笑に付して、第二次世界大戦以前に書かれた「古典」から養分を吸うことを忘れ脆弱化していく日本語を脇目に見ながら、恋煩いのように英語の学習に熱中する人間に溢れている。インターナショナルスクールの実態が象徴するように、明確に日本語を捨てて英語を選んでいる人間が毎年毎年、増え続けている。

それを可能にするのは、海外の学校への留学が容易になったことや、英語を母語とする多くの人間が日本での有利な条件に引かれて日本に教えに来ている、という現実だ。インターネットのさらなる普及は、この傾向をさらに強化するだろう。インターネット学校が出来るであろうし、そうなる日本が島国であることが教育言語の選択にとって障害にならなくなるだろう。

学習の臨界期以後に外国語を学んだ大多数の人間が、実利的な理由で国語外国語化論に反対しても、若い世代が少しずつ英語化して行くと、徐々に国語英語化が進んで行くだろう。このような現実を目の前にすると、日本民族のように、人口や経済力からみて規模の大きな人間の集団が、長い歴史のある言語を自主的に捨てるという前代未聞のことが起こる可能性を一笑に付すことはできない。

鈴木孝夫なら、それほどアメリカ人になりたいのか、と呆れ返るだろう<sup>9)</sup>。筆者も同じ思いだが、この変化が大陸棚の移動のようにゆっくりであることに危機感を抱く。なぜなら、明確な選択がある場合は、人間は少なくとも真剣に考えるだろうが、今のような状態では、それが選択とは感じられていない。なんとなく、そんな風向きである、という特殊な日本的態度が事態の真剣さを覆い隠す。そこで、日本人に突きつけられた選択を明確に表現して、この論文を終えたいと思う。

第一の問いは、日本語を捨ててもいいのですか、というものだ。日本語が象徴する古典文化や日本人の知恵や文化をある程度捨てても我慢しますか、という単純な問いである。筆者はすでに第七章で、答えを出しているが、もう一度、要点を繰り返したい。

日本人は、人類の遺産としての日本語と日本文化を守るために、祖先との架け橋である日本語を復活させ、それを磨き、より美しい言葉としていく努力をするべきであり、それが甘受しなればならない宿命なのだ。そのために、眠っている美しい作品をまず蘇らせる作業に取り組むべきだろう。これが筆者の答えだか、他の人はどう答えるのか。

第二の問いは、国際社会の重要な一員として生きて行くのに、世界とのコミュニケーションはどうしますか、というものである。上で述べたように、日本語を母語とする外国語学習にとっては非常に不利になる。その問題をどう解決するのか。

外国語を生活の中で使いこなして行かなければならない人間は、鈴木孝夫も指摘しているように、実際には少ない。上で指摘した不便を忍んでも、少数の人間の集中的訓練で必要な程度に学んでいけば、それで足りるという選択もある。

または、外国語を臨界期以前に学習し始めて、日本語とバイリンガルになることを目指すべきか。外国語学習法としてはこの方法がもっとも合理的である。

日本語を母語とする我々が外国語を学ぶ時の不利は、音素の習得に関するものである。詳細な説明は省くが、逆に考えると、日本語は世界の多くの人にとって学び易い言語なのである。故に、日本語を国際語にする大きな努力をして、日本語でコミュニケーションをとるという選択も有望である。

第三の問いは、臨界期以前に学ぶ言語の選択に関するもので、多くの人（親）は英語を選択すると思われるが、バイリンガルとして外国語を学ぶ場合に、英語だけでいいのですか、それが、日本の国益や日本人の幸福に繋がっているのですか、というものだ。世界には、数千もの言語があるといわれる。もちろん、近代社会に適応するために十分発達した言語を数えれば、ずっと少ないであろう。しかし、フランス語・ロシア語・ドイツ語・オランダ語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語・トルコ語・中国語・韓国語・ギリシャ語・アラビア語・ベトナム語・タイ語・インドネシア語等、思い付くままに挙げても多くの学ばれる価値のある言葉がある。日本人のすべてが英語を勉強してどこが面白いのか。日本の普通の都市に行けば、上に挙げたように世界中の言葉をバイリンガルとして話す人間が複数いるほうが、日本のためにも、世界の発展のためにも有効だろう。それに、一つの外国語を日本人全部が競争して学んでも、競争自体が面白くないだろう。なぜなら、競争とは結果が出るものだし、勝者は少数だ。すくなくとも、競争する種目が多ければ勝者も増えよう。ちょうど、オリンピックのメダルのようなものである。外国語という種目が一つなら、金メダルは一つしかない。

日本人としてのアイデンティティを日本語をしっかりと身につけることによって確立して、あとはできる限り多くの言語でバイリンガルになる競争をするのが、実りの多い選択だろうと筆者は思う。ただ、言語の有用性が経済的に問題になるかもしれない。しかし、英語の仕事が多いからといっても、その総量は決まっている。英語以外のバイリンガルは、その分野でまた仕事を増やすだろう。例えば、タイやインドネシアで働く場合に、英語が便利とはいっても、タイ語やインドネシア語のほうがより便利なことは確かなのだから。

しかし、日本人はいかなる選択をするのか。

各自が明確に選択すべき問題を意識化しそれに向き合うことが重要だ、と指摘して終わりにしたい。(完)

#### 注

- 1) 鈴木孝夫『日本語と外国語』岩波新書101、1990年。
- 2) 山井徳行「日本語とその読み（その一）」『名古屋女子大学紀要（人文・社会編）』第四十八号、平成十四年。  
および、山井徳行「日本語とその読み（その二）」『名古屋女子大学紀要（人文・社会編）』第四十九号、平成十五年。
- 3) 野口英司編集『インターネット図書館 青空文庫』はる書房、2005年。
- 4) 井上靖『井上靖全集』第一巻、新潮社、1995年、581-582頁。
- 5) 同上、586頁。
- 6) 同上、27頁。
- 7) 藤堂明保他編『漢字源』学習研究社、1993年。
- 8) 山井徳行「日本人の聴解力の仕組み」『日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集』No26、2002年。
- 9) 鈴木孝夫『なぜ日本人は日本を愛せないのか』新潮社、2006年。

参考文献

「国語外国語化論再考」はこの紀要に4回にわたり掲載して、本稿で終わる。引用文献に関しては、各稿で示しておいた。ここに挙げる参考文献は全体に関するものであることを断っておく。

大江光代『だから、あなたも生きぬいて』講談社、1999年。この本の、読者を念頭においたルビの打ち方は参考になる。

小池生夫編集主幹『第二言語習得研究の現在』大修館書店、2004年。

酒井邦嘉『言語の脳科学』中央新書1647、2002年。

ジャック・メレル他著、加藤晴久他訳『赤ちゃんは知っている』1997年。

鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書C98、1973年。

鈴木孝夫『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮選書、1975年。

鈴木孝夫『ことばと社会』中公叢書、1975年。

鈴木孝夫『武器としての言葉』新潮選書、1985年。

鈴木孝夫『教養としての言語学』岩波新書460、1996年。

鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないのか』岩波新書622、1999年。

増田ユリヤ『インターナショナルスクール活用ガイド』オクムラ書店、2001年。

山田恒夫他『英語リスニング科学的上達法』講談社、1998年。

山本雅代編『バイリンガルの世界』大修館書店、1999年。